

積み残しになっている課題が多い。

一つ、衛生環境や治安が向上しても、いまだ数百人規模の野宿生活者がこの地域で極限的な暮らしを余儀なくされていること。二つ、野宿生活から脱却して安定した居所を得たとしても、社会的孤立の問題が解消していないこと。三つ、地域の活性化を図ることが結果的にジェントリフィケーションを引き起こし、あいりん地区に暮らし続けた人々の生活に負の影響を及ぼしかねないことである。

・生活保護をめぐる問題

脱野宿の手段として最も一般的なのが「生活保護」である。安定した住居をもとない人々が生活保護を受給することで衣食住が整い、生活再建に向けた基盤が整えられる。しかし、現実には一度生活保護を受給すると脱却するのが難しいケースが目立っている。

・野宿における課題

年々、野宿者数は減少しているが、深刻なのは高齢化と長期化である。

・求められる支援の仕組み

あいりん地区では、公的セクターによるフォーマル福祉と民間セクターによるインフォーマル福祉が混在している。このような、分厚いセーフティーネットは生活困窮者助ける役割を担っている一方、独立性が強く連携が進んでいるわけではない。こうした課題を受け、西成特区構想では 2013 年度に「あいりん地域モデルケース会議」を発足させた。同会議では月に一度、地域住民の生活を支える実務者が集まり連携を進めている。今後はさらに住宅、医療、福祉、労働など多分野での包括的なサービスハブを作ることが重要である。そのためにも縦割りになりがちな行政施策を改めつつ、地域内外で活動する民間組織の連携を一層強化させるシステムづくりが欠かせない。